

平成二十六年十月十日発行
皇學館論叢第四十七卷第五号
抜刷

紹介

白山芳太郎著『神道学原論』

千種清美

白山芳太郎著『神道学原論』

千種清美

本書は、白山芳太郎教授が「神道」を明らかにすべくこれまでの考察をまとめられた一冊である。

神道学を修めているわけではない私が書評を記すというのは、はなはだ僭越なことではあるが、知人より勧められたのでお許しいただきたい。

私はこれまで筆者と面識はなかったが、著書は拝読していた。

伊勢神宮の第六十二回式年遷宮にちなむ諸祭の取材を通して、これまで見えていなかった伊勢神宮の歴史や祭祀に驚愕するとともに、こうした祈りのかたちはどうしてできたのか、神道の儀式とは何であるのか、そして神道とはなんなのか、とら

えられずにいた。そんなとき筆者の『神道く日本人のこころのいとなみ』（平成二十一年、国書刊行会発行）の冒頭の文に出会ったのである。

そこには、日常的に使う三つの言葉を例に挙げて、日本人のこころを説いていた。

「いただきます」、

「おめでとう」、

「ありがとう」である。本文を引用する。

太古以来、日本人が「いただきます」というとき、いただくものは「神の恵み」と信じられてきた。神の恵みをいただくこ

とに感謝し「いただきます」と言われてきたのであって、このような言語の発生は古く、狩猟採集生活時代にまでさかのぼると思われる。当時、食は、いつも得られるとは限らない。また、食は動植物の命を絶つことよって得られる。神からの恵みではない食というのは、この列島の人々にとつて考えられないのであった。

この「いただきます」の解説に、日々当たり前のように手を合わせ発する言葉に日本古来の食への感謝が根底にあることを知った。神道とは神社の中だけの食ではなく、日本人の日常にしっかりと浸透しており、日本人が生きる上での規範にもなっていたと気づかされたのである。

暮らしは衣食住で成り立っている。なかでも食については重要だ。人間は生きていくために、ほかの生きものの命を絶ち、食べなくてはならない。その罪悪感をどうとらえるのか、どう解釈するのか、これもまた宗教の領域である。

近頃では、給食費を支払っているのになぜ子どもが「いただきます」と言わなくてはいけないのかという保護者からのクレームを受け、先生が仕方なく食事を始める合図として笛をピツと吹いている小学校の事例をあげ、筆者はなげいているが、同感である。戦後教育のなかですたれていった「こころの

教育」の復活がいま、急がれる。

正月など祝い事に使う「おめでとう」は、相手によい言葉をかけることよって、相手によい一年がやってくると信じる、言葉の信仰からきた言葉で、相手の未来を言祝ぐこと。そして「ありがとう」は単に感謝するだけでなく、相手の親切に「神の恵み」を感じるという意味であると説く。平易でありながら、神道の核心をつく、そこが筆者の拠つて立つところであり、その良さが本書でもいかに発揮されている。

本書『神道学原論』は、「はじめに」で聖徳太子が豪族や官人などの心構えを記す『十七条憲法』の第一条「和を以て貴しと為す」の「和」の精神から神道にアプローチする。公務員の服務規定を書いたこの憲法の制定により、律令以前の公務員には、「和」が求められた。また仏教受容の推進派の聖徳太子も、反神道というわけではなく、敬神崇仏であったと強調する。よって、日本の仏教は、重層信仰として神道の上に重ねられ、寺院には神道的要素が色濃く残る、「和」を根にした独自の仏教が生まれたと指摘する。

本書は前半と後半に大きく分かれる。前半は、

第一章 清浄と正直

第二章 祝詞と神典

第三章 明るく生きる

第四章 氏神と重層信仰

第五章 毎朝御拝と「和」を貴ぶこころ

第六章 日本人の信仰的特質と神道

第七章 北畠親房の思想と中世神道

第八章 祭祀とその古姿

後半は、『古事記』の読み解きである。

附『古事記』神代巻の概要

前半は、細かく章を分け、一つひとつを簡潔にまとめており、なるほどと読み進めていくことができる。

第一章では、「かんばせをおかして君に直言した」北畠親房の『神皇正統記』を、伊勢神道を知る良き参考書としてまずあげ、続いて米国の中学校世界史教科書に掲載された本居宣長の「敷しまのやまと心を人とはば朝日ににほふ山さくらばな」を中学生向けにアレンジした詩を紹介し、海外では日本の神道は、「シンプルな自然美を愛する心」と受け止められている」とに言及している。また、「風の神がいらっしゃると信じる」とは信仰である。この信仰を持っているか持っていないかということは、(前述の)職人でいえば、職人氣質をもっているか

白山芳太郎著『神道学原論』(千種)

いなかにあたる。日本人の気質の根底をつちかってきたのが、この神道の信仰である」と神典から海外の事情、職人氣質まで、縦横に引き出して展開する。

とくに第六章に納められた、日本人の信仰的特質について、平成二十三年に中国の山東大学において開催された国際宗教シンポジウムで発表した「Justice」をテーマにした文章が印象深い。神道の立場からの、公正についての考察である。英文とともに掲載されているのが注目で、少々長いが引用する。

Shinto classic Kojiki describes the following

神道の古典『古事記』に次のように記されている。

The first male and female gods Izanagi-no-Mikoto and Izanami-no-Mikoto.

「最初の男女であるイザナギノミコトとイザナミノミコトは、after creating the Japanese islands,

日本列島を生んだのち、

were to give birth to gods.

神々を生むことにした。

those gods included the god of the sea.

海の神、

the god of the river.

川の神、

the god of the wind.

風の神、

and the god of the mountains.

山の神なむを生むた」よみゑ。

In the end, Izanami-no-Mikoto

そして最後に「イザナミノミコトは、

dies after giving birth to the god of fire.

火の神を産んだため死んだ」とある。

Her death, which is the first death in the myth.

イザナミノミコトの死は、日本神話におけるはじめての死であるが、

sets off the birth of various culture-related gods including the god of clay, the basic material for metal and earthenwares.

その死をきっかけに金属や、土器の材料である粘土など、文化にまつわるさまざまな神が生まれており、

It is believed that all actions of these two gods, Izanami-no-Mikoto and Izanami-no-Mikoto, created the basis of the environment and essentials of nature in which Japanese people

live.

イザナギ・イザナミ二神のあらゆる行為が、日本人の住む環境や、自然のもとなるものを生み出したと信じられている。

金属、粘土、川、海、風、山、島、つまり、いのちのない物体に対してまでも、あがめ、しかも、それらに上下がない。

This idea of equality among all things existing harmoniously shapes justice from the Shinto perspective.

それが、神道における「justice」であって、伊邪那岐命と伊邪那美命のあらゆる行為が、日本人の住む環境や自然のもとなるものを生み出しているのである。

最後の文は直訳すると、「調和して存在するすべての物が同等だという思いが、展望的に神道に公正さを形づくった」となるのだろうが、筆者は意識されている。この発表は日本神話を端的に伝えているだけでなく、詩的で、音韻が美しい。『古事記』はもともと口承であったことから、口づてに伝承しやすい耳障りのよい音韻を大事にしていたことは想像しやすい。神社界をはじめ、さまざまに神道を世界に発信しようとする機運のなかで、日本文化の持っている言葉の美しさにも注意を払うことが肝要であることに気づかされる。

神話についての考察は、各民族によって、何に心をときめかせたかという心の遺伝子がつまっていると、「心をときめかせる」ものにとらえている点が目新しく映った。これまでも神話は記録ではなく、日本人の記憶が記されているという指摘はあつたが、心をときめかせた感動だからこそ、親から子へ、子から孫へと語り継がれてきたというのは大いに納得できる。筆者の豊かな感受性ならではの分析だ。

また、世界的なものの考え方に人間的なことを尊重するヒューマニズムがあるが、地球温暖化はむしろ人間だけを大切にしたことに起因があるとする。仏教の生きとし生けるものを大切にする以上に、日本神話では国土をはじめ、山も川も風も火も、金属も人間も同じように神が産んだものと語られるがゆえに、日本では森林面積が国土の六八、九パーセントという高比率で維持されているというのだ。地球温暖化の阻止には、日本の神道のすべての「もの」を大切にするという信仰が重要なのである。

日本人が神話を忘れてしまったとき、豊かな緑の森が消えるのかもしれない。

後半は、附『古事記』神代巻の概要、である。

第二章で、神典では単なる事実の断片ではなく、その背後に

白山芳太郎著『神道学原論』（千種）

潜んでいる世相や、人々のものの考え方を読み取る重要性について述べ、専門的に扱う学者ばかりではなく、一般の人々によって、じっくり読み直されるべき時期にきていると指摘しているが、この概要の項はまさしく一般の人々のために神典を紐解いている。

『古事記』の筋立てに沿って、天地初発、列島誕生、黄泉国訪問、三貴子誕生…と、読み解きは続く。

随所に投入されているミニ解説が興味を引く。

日本列島を称する「大八島」の言葉は、八が日本ではめでたい数字だから使われていることは知られるが、中国では九（九月九日重陽の節句）、インドでは七（そのため仏教の法会は初七日、ふた七日、二十一日、二十八日、三十五日、四十九日に行う）、イスラム教も七が聖なる数。キリスト教はダンデの『神曲』が三部構成で、各編は三の倍数の三十三から構成され、各詩の行数も全体にわたって三行ずつとしているなど、三を聖なる数としているという。日本神話を語りながら、世界の信仰にも触れ、読者を引き込ませる。

興味深いのは、天照大神が女神である理由についての記述だ。ギリシャの太陽神のアポロンをはじめ、エジプトの太陽神ラーなど世界各地の神話では太陽神が男神であるのに対し、日本は高天原の主祭神である天照大神は女神で、月を司る月読尊

は弟神で男神としている。この点については研究者から郷土史家まで諸説を唱えるが、筆者は温帯地域と熱帯地域における人々の太陽のとらえ方に起因しているとする。つまり、温帯の太陽は動植物を育てるため、慈愛に満ちた女神としたが、熱帯の太陽は荒々しい男神で、月が女神とする。また、国旗も月や星が用いられこと。日本の太陽マークの缶詰が熱帯では腐っていると思われるために、ラベルが月星マークものに変わっているというくだりでは、筆者の知識、好奇心、探求心の守備範囲の広さに改めて感心した。

本書は、文献の深い研究に基づき、さらに平易な言葉でもって神道の概念や考え方、神典を読み解いたものである。そのため、神道を学ぶ者や研究者だけでなく、これから学ぼうとする者と一般にも門戸を開いているといえよう。伊勢神宮の式年遷宮を機会に多くの人々が伊勢参宮にいられている。伊勢神宮だけでなく、神社への興味もこれまでになく高い。そうした時代にあつて、一般に向けてのまなざしをもつ筆者の役割は大きい。神道を知りたい、学びたいという人にぜひ手に取ってほしい。

筆者が講師を務める公開講座に参加した。「正直と浄明の心」が演題で、日本人の精神性を端的に表現する言葉、清く（浄く）、明るく、正しく、直くという「浄明正直」を日本文化と

の関係に留意しつつ考察するという内容のだが、本論へ至るアプローチに一時半の講座のうち、長い時間を費やされた。それでもきちんと本論は話されたのだが、筆者は申し訳ないと謝罪された。ふつうなら言葉で言う程度であるが、筆者はわざわざ演台を下り、参加者の前に立って頭を下げられた。その真摯な姿に「浄明正直」の心が腑に落ちた。まさしく「浄明正直」なお人柄であるとお見受けした。

末筆ながら、今後も「浄明正直」の心と『古事記』を研究者と一般に読み解いていただきたいと願ってやまない。

（平成二十六年五月 皇學館大学出版部刊 A五判 二二五頁
本体一八五二円＋税）

（ちくさ きよみ・文筆家 皇學館大学非常勤講師）